藩鑑巻之二百九十一目録

い部十四

上杉弾正大弼藤原輝虎

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑巻之二百九十一

上杉弾正大弼藤原輝虎

一 永禄四年辛酉十二月初北條氏康父子武田信玄と謀し合せ武州松山城を攻るこの城は近年太田美濃守資政入道三楽岩槻より攻取つゝく上田又次郎を追ひ出し七澤七郎を

とりたてゝ上杉憲勝と號し
已に被官都合二千餘をこもらしめ
城は上田左衛門尉難波田彈正ら
いくさましくて代々城郭のかこひを
きびしくこしらへしに近年北條家
持城としてつゝく上田又次郎判發
しゝて圓隆と號せられしか逆
積要害を修せられしのちこれ三樂に
まを恐れて四方に堅固をまうけ
北條家を引請一戰の用意を遑く
して上杉謙虎里見義弘に通じて
後責の約束を堅くまもりゐたる北條
家らの城責を大事とうけ氏康
氏政父子旗にて十一月十一日より押寄
金鼓を入まして土居を掘りくつ
させ矢玉を飛しくらし城を攻む

といへとも城急に陥りかたかりしかハ右
三楽方より北越へ注進しけれハ輝虎今
年九月信州川中嶋にをいて武
田信玄と無二の一戦をとけられしか
ともいまた勝負を決せされハ此幸
ひ武田父子この地に出勢せハ北條
武田両家を相手にいくさし勝負
を決すへしとて後責の用意ありけれ

とも其年も暮けれハ大雪ゆへ往来
自由ならさりけれハ十一月廿七日輝虎越後を
立つて明年二月上旬漸やく武
州石戸に着陣しけれハ武田信玄父子
も同二月に甲州より松山に向て
攻戦の手立に及ひけれハいくさも城
急に陥りかたかりしに上杉輝虎武
州へ出太田三楽里見義弘を催し

合戦のよしきこえけれはいつく
あらたに寄手も疑擬してこらゝる
武田方飯冨源四郎昌景（後山縣三郎とあらたむ）謀
反として勝式部しけるよりこの城中
にしたよしあつめ所々人質を
武康へ出さしめ福嶋伊賀守ゝあ
つけ居るまきれ通城中へ入けれ
まいらせよりらの者三楽にしらさ

しみありし且城を皆しそむきたるゆへ
心易く軍事在陣まて勝云けれは
廻日甲相両国の後患責の用意甚
難し上杉輝虎三月末あらしては
今程あるへからすとて里見義弘は三
浦三崎の城戦利あしからすして当
方への出勢叶ひかたしなとつき
三楽一人の後責は思ひよらさる

とゝのへさせけり然れとも城の陥る
事日あひあるへうもあらす同は一日
も早く降参せよと一所懸命
の地なりとも請城兵の命もつゝかなき
ことを約せらるへし城兵の中より飯富
昌景か首を降参の者もあるよし
を申遣したるにより告上杉憲勝
驚ひて勝式部よりたのみ降参

三月三日に到り城を渡しぬ出て上
杉輝虎に降参す里見義弘
太田三楽斎を壬生宇都宮をあつけ
同六日松山後責として生張の本城
まてくりよ陥りけるゆへ輝虎大に
怒り三楽を叱し刻のことき大臆
病ものよ城をあつけ置て輝虎
に面目を失ひけるとて甚憤怒

ありしに三楽は謀めくらして三楽
別ち城中の兵粮矢玉用具等の書
付并憲勝か人質を添遣し輝虎は
方まて輝虎やうやく憲勝か人質を
謀識し三楽と和談別是非を
し甲相の多くせり合をしらく
とかくしても甲和の御皆切所をへ
とりかく厳令まして日ゝ席中する

兵を引入る輝虎怒りに堪へかね
らの邊まて敵城はあらさる日やなく
関東私市城まて小田伊賀守景代居
城まてしく寄ふらのゆめのさらのみ小田
原方にあしさへはとも小田は成田か
質あしあからの城を攻へしとて輝
虎の兵を私市に移まて共城三方に
ぬまをつゝとりまんゐる一方にて

しく要害無双の城なり輝虎みつか
りし城の四方を巡検し攻撃の配流
を考ふ志つるに本城より二の郭へ
入つる白廊下橋のかへ地白帷子水
積よりつるにてそ或三度まて及ふ輝
虎やうやく二丈をめくらし迎ゑの
在家町屋をことことく城の後のふ
けんかけらみ欲をくみ埋草を入

惣勢を二つにまつけ一手は大手の木
戸よりつかはし樹寄和泉守を大将
たらしむ一手は城の後より一同
に閧の聲矢さけひをなしく攻
入んとす城中大手の木戸口を第
一あまりける所に本城の後より寄
手攻入ゆるく城内の人質小童幼女
老弱さしけひけれは大手をまもる勢

叶はさりしかハ城急に陥りけれハ城
主本城よりつゐに三楽をたのんて
和をこひけるゆへ小田伊賀守一命をた
すけ三楽に譲り下りしかハ茂呂
同備中は小田原へのかれしかハ輝虎
こゝまてに兎角なかりし上州厩橋城に
入り城主長尾弾正入道謙忠今度松
山後責の催促に応せさりしく遅参

せし事をとかめて謙忠に自殺せ
しめ厩橋には北條丹後守を入置
下野国小山城をせむ小山弾正力屈
して降参し人質を出して輝
虎に従ひそれより佐野城をせめ
和議降参につき四月十日輝虎北越
に立帰る　武家事紀

一　永禄五年輝虎公松山後援として

一 薩兵八千人を聊ひ上別鹿橋へ着
陣別ち岩櫃へ飛勝を以て貢
正早く出勢いたしまへき右衛門され
され武州の地へ乱入三月四日石
戸の渡まうく押寄給ふ是より松
山へは下道六里あまりもありけれ
今朝城を明渡されけれ風聞に云
是を聞召しいかにも薩を松山へ

進あらるべき所に吉田若濃入道条
陣せられ龍虎公賞を以て松山を憲勝
かくしき兵弱の者に大節の城を
預けし後援を待ちずして敵に降る
三楽謹信に後諾せられけるとて時出
ぬならべき安からぬ事に恥辱を与
へしとの事なりしに三楽是に対果され
者を當家の弓矢に瑾を付る事

奇怪の事なりとて大に立腹し
給しかば三楽も松山の落去を聞より
公の恐大形ならず扨こそ如是とあきれ
ぬ處りけれは公も膽をつぶされしに
城中には兵粮玉薬弓鉄炮の用意
澤山なれは持堅ん事輙くおへと
も憲勝の柔弱最三楽を疑り偏に
恐入ぬとて帖紙より書簡を取出

し公の披見に備へ且は憲勝質を
しく五人の将を岩櫃に趣へ置る
次第詳に語しかは公是に於て公絶滞
ありしか少し機嫌直りて仰ける
は憲勝か甲斐なき仕儀人質の
小世忰なれは撫殺にせんとも見へ
また抱のんゝも殺さぬ幼年の故なれは
しひは不便なりければ命を助る條

貴正帰城の後我波城へ送りて北條
丹後守へ預けおかれしかバ三楽ハ
申送りせんとて土器にて自
ら三献酒を関てたゞ三楽ハ申しおふ
三楽押戴き引盃を傾けたりとき云
申しくハ信しけるハ今度松山在陣
の武田北條の両旗人数四万の内外
にもあらんに貴正若くして同じく北條

家ハ氏康氏政由井源蔵武田
家ハ信玄義信逍遥軒揃て大将分
六人凡五万余の着到と兼ねりける
中けるハ公の曰氏康信玄こそ大将
たる上義信氏政むすこ子共ハ何
人もあるべし謙信ハ晩先にて日の眷
者はまさりてるもの猶未足ありて輝虎
日来所存ありて戦ふ八千を限

りしかバ小勢を押るゆへ北條も
甚だしかりし故旗の大軍ことに小人數
を以て挑まん事は日本國中の
往返にして總も慕よりの徹節
たれは有るとも勿論職にあらねど
但支家切所にも乏しく一切取合さる
風情手にたらくて戰の術をしらぬ而
あまり笑に依て謙信思慮ありし

邊に北條家持の要害の城はあまたにて
こと問答して三樂斎曰勝西須山根
城より北條持分の間には通さしと申
せしかまへ先なり當所よりは関東
道二十里餘りあれは一日には往返
自由に往しかたし云ひ縦ひ城主
は何者をして防くとも費用かいかて悪
の城を攻囲に籠下小田伊賀守累世の

城主たりしか実子なく成田長泰
か舎弟助五郎家持一跡を継く居
在しか管領公聞て其助五郎に對し
輝虎君長泰こそは叛けるとも長
泰か舎弟にてあれは是もまた用ある
ものゝふなり急き推参しけ極切にて
是非に城を屠り抜へし早々立
てしく宣ひけれは三楽然くして押へ

申しく請あけれは助五郎存の外
驍勇の士にて城地も四方堅固にて
いひ粮米陣具まても敵の如く備へ
持騎馬二百四五十騎余二千はかりも
楯籠るなれは早速の調儀なるまし
しかなくしてもしも其月甲南
の多勢援兵あれは俄に城を攻落
し難しとても彼か家に向ひて後度

の合戦勇ましき大事にて軍
は始終の勝利にて肝要を兼ぬる一
まし厩橋へ馬を納めて退くは土
丈夫なるへしとしかれとも荒木とし
て作けるは善哉貴正異見理に當
まりけりとありなりし輝虎是まて
出張して親摸なくて旗を収ん事
争に角にも心地清からすとて信玄氏

康は黒白の合ちをわかり謙信に
後攻にそひかひなしとりし大将に
あつまりて卜張の輩まなくは嘲を
なし闘争もとくの見切来なんと
罵り笑んことく當家の諍先まてを
うしふ関東の諸士騒耳しくて従へ
譲りなれ果は謙信の弓矢の譲て
威なんする決せり今まさまに隊

の間にゝても壮年の族は偏に勇
在之ふへき思ひん事謙信ニ不本
意なりもし甲南の両家勝西の
後詰在なしけるさ在掛るに
在りては思設たる一戦運命在限
つきに相挑ミく尸在郊原に晒さん
事ヲ子細にや存ふ勝西の業因
三楽よりく存知の上なしれハ先陣在

頼ミヤしとく言在敢てく宜ひし与ハ
三楽而下の士大将章ゝく諷諫まへき
やうりなしく各十死一生在心底に籠
て其用意在なすましてく 北越家書

一 輝虎刀根川二本木の渡在越し松
橋に至りく先使着在而ゝく北條氏
田の両将くいひ遣ハしけれは今度
松山の後詰の為出馬けるまて而よい

まへし厩橋にむかひしかとも所存支離の
大軍を以て責圍とも急勝叶はすして
落城せしめ残念のあまり心外には
然ハ落城の以後厩橋へ着陣して
まことに後れしとて後悔して思ひへし
と面目なくは去なりしか謙信是まて
出馬ありしかし空しく退かん事氏
康公信玄公に對し却て武道の

意外に相似たり然れとも是よりは
日氏康公の領分山の根の城を攻崩
し今度の残心を散せんと欲まて
無用と思召さハ北條氏政家とし
て帰らせ玉ひて其時城を巻解して
軀向ハ謙信有無の勝負を決まらん
し悲しくは北條氏の大軍を
以てしもまた支留らせん事思ひしも哉

らせしに悪辟なる口上にて此所の
別当座主に使者に命して翌朝に
日根川二本木の新橋を渡り橋の
綱を悪く斬流して渡りを断
ちて氏康信玄陣所の前を過て踊
越して山の根の城へ猛虎の山を越
え来て堂々として押詰けり新橋
を斬流せしは韓信が背水の術計

に相同し謙信は天性武道に賢
き生質なるに少年より軍道に
心を寄せ和漢の軍書に眼を晒し
殊更は上杉の家に竹内宿禰の嫡流
なる依田駿河守定行に因て六韜
傳来の軍術を授り千變万化の玄
術を練磨し近くは吾朝河内
判官楠正成の軍配を尋探り凡て

云道にていつては摩利支尊天の再
誕なりしん斬りて山の根の城にて着
陣し此時の軍大将荻田主馬左右
てひらく此城攻は先陣後陣一同
に攻登り一刻に落城へしかとも
猶豫まちし日事なりしれ主馬兼て
諸卒にも知らして四方八面より推
寄を待受しとも手ともも来とも〻せ
とも手ともて倒れて着さし足つまひ
にしてく一枚楯さ服にまさしんて遂
籠城さ引退て直に居差別もなく
戦て声さ出して責上る其声
天に響て地さ震て夥しく
九天も砕て地に落坤軸は裂て
海となり此有天地滅却せらると
すさましかりし形勢なり云

程ゟ城中にはとても適ぬ所なり
とて弓鉄炮を放て爰を専途と防き
けれハ雨の芭蕉を打より甚かりけれ
命を惜まず防戦しけれとも寄
手は大勢にて荒手を入替息を
つかせて揉破り一日半夜に責落し
老若男女籠りたる者のこらす首残
らす三千餘人斬にし心地よ

しとて勝閧を揚給ふ　越後軍記

一　輝虎公勝西山根城を攻落させ給ひ悪の
成田長泰も再ひ麾下に降りけれ
ハ依気色快然として東上野へ打
退給ふ所に侍西使を以て甲南の敵
陣へ作遣させし給は謙信より申遣させる
如く山根の城踊従へ厩橋へ凱旋
仕る條遺恨あるへい戦を挑けるへし

両旗の大軍に向って干戈を接へん
は年来の名望何事か是に志かん
殊西表立馬の用も両家後攻あるべき
儀しと謙而推察いたし終に
せしめし所存輝虎曾て意を
得ずて但に返答の趣意にて所不審
を散せんやとて作送る斯して両
将立陣の山際迄て押通りぬ

時に甲州勢二万五千餘太鼓を打
て軍を出すといへとも氏康へ
信玄より何の牒送もなかりけれ
ば南方の三万餘は猶豫まして陣
を固む武田家の進みを見て形勢を
見つて味方の先隊戦を催すの機
あり公別看得ましくして是を
はつきと掛る敵にあつまりて退

玄ん率を統して斯の如きの氣
勢を示し本営の變を伺ひ知り
容易く一騎一卒も近向ふへからずして
今見る謙信か詞の如くならんと
案じしか果して甲兵二三町ゝ
程推寄り後陣より部伍を
疊んて先隊二の見服備列を留
して引退く其姿龍蛇の奔逸を

なせり公も信玄の武者扱を識
に美観なりとて褒美し給ひ
けれハ群臣は公の見察違ハさるを
奇妙なりと感しけるとそ公信玄
は海等平ゝ推募を怪む事莫
且只當然の勤務のみ所以は晴信
平ゝ勝西城を攻るを知く力を合
せる日に及ひまして方は到て吾の軍

は婦けれハ世の譏り贖しかるゝ所なるら
ん謙信是は對して其後の變は探
り退口の越り色疑なきゆゑ決定せる
敵の相色は知事ニ三軍の主将の要
勢ニて是れハ自今以後ともに名眼は
著らく可察なくし天地玄遠なり
とゝくても探窺見の三つは以て識
量なるはときニは十ニ八九中らんなり

いふ事なし況や人事ゆゑはいはく
はや何の奥深き事ありとも倉
得せさしめんと宣ひけれハ沉皆謹
て服膺なしたりとぞ　北越家書

一 今度山の根の城攻にハ謙信公名誉
の死間をいたし北條氏同姓の間
せしめ給ふ事謙信公深く秘
して言ハず秘し給ひけるとも

故有て漏達せるに依て密に日
記に留記て後代良将の軌範に
備へるものなり前に記せることく
上杉輝虎の徹なる上氏康信玄の猛
威に勇気撓てみ謙信公の後詰を
待つばかりして城を渡して相
別に降まつり故に謙信公の出馬陸
無きやうりに風説ありて公愈怒し

て氏康抱の上の根の城を無理攻に
せんとありて三楽に彼城地のや
うすを城主の勇武智謀の有無人数
の多少を委細に尋ね給へり三楽
対てやは彼城形の如く堅固の地
にて城将は小田助三郎宗長是は忍
の城主成田下総守長泰二男にて小田助
三郎若将中ても智謀深くしては義ら

ましはりとも其外飽多く勇氣
あり城に籠る士三百餘騎雜兵
三千に及べり其上兵粮用具以下
不足無く剰へ氏康信玄両勢七万
にて彼城近邊に屯せり今謙信公
の勇勢を以て彼城を攻らるゝとも
とても一日の中には中々落城仕べ
くとも覺へかたし城を防禦あらる

中に北條武田の両將数万の軍を
以て後詰あらんたとひ城は攻
落しぬるとも後度の一戦由々
しき大事なるべし先此度は越後
に帰陣ましまさんこそ當然の
理なるべしと申す其上又三楽申は今
度上杉輝貞柔弱の庸將にて松山
の城を相渡し其身はまかりて相州に

降るこてしく普く世の知ところなり
然れは武度迷ひて越後に公を收め
候ふとも武田北條はいふに及ハ
ず関東八州に至りても誰かさるミし
かへすも只掛るも引も甚宜しき
さまは畢竟の勝利に全くおさまるを
らきは古今名将の肝要とし候ふ
こしまたくれは曲て先は飯國所

要に務めるとのことなり謙信公ハ越
左関係の三楽ヵちて所職に於て
皆公に當まりぬるうへは甚善言
に自ら迷ひに公を收め府城に帰え
しことてくも武度の後詰何とやらん
心地潔らしきを白縫氏康信玄も
あれい乎ら後詰たときらぬあとは
思ふへからすと然はあまりとも一向

心なきゝ雑人ともにて手遊ひして後悟
しけりなんと嘲らるゝとも
無念なりし雑人の奴原如何に嘲り
沙汰すともいかならんも文は心に叶へ
きしにはあらねとも弓矢の道は
又さやうにもいひ難し敵方雑人
とものゝ沙汰すとしても味方の雑
人原も又同しく嘲り私語合

よりなりし疵目ときは事なく品
に依て勝負定ることも時の間より
人数を揃しこと成難きものなり
千丈の堤も螻蟻より壊るゝ三軍の
不和は狐疑より生すといへり然
一関東幕下の諸将奥意なしとも
思ひいれなんあれは耐我鋒先の
極ともも隠へきなり一向三楽諫言を

百所を用ひさるにはあらねとも就中
にをいては謙信重く手を辞す
ましんはあるへうしけれとも武田小條の留
十月廿日にもせよ安将の眼前にして
山の根の城を攻落し小田か首を斬
籠城の奴原まて一々撫切にして謙
信か鋒先を小條武田に見せしめん
し甚上には武田小條と合戦せん

こしと我大望にあらさる所なり氏康
信玄掛り来るにをいては有無
の一戦を遂は雌雄を一時に決すへし
へきなりと宣へり衆上重て三楽も言
を出すこそなかりし其餘の老臣宇佐
美を始何れも一言を申上ることなく
能のまて各一同に十死一生の合戦し
て義を守り運を天に任せらるより

外のことあるへからすとして心中に思
寵あらく皆く自分の陣所に退き
また謙信公は獨り寝所に入給ひ
て常に心易く側に召仕ひ給ふ
近習の小臣を召して密にいひ含め
給ふは信玄の陣中に行て信玄
と氏康を隔つへきの謀議なり
彼者申して云命は義に依て輕し

君の一言を感して臣の百年の命
を捨ると申古語常に語聞傳ふ所
なり誠に君の為に臣の一命を
奉んことは今生の思ひ何事か是に
まさることあらん但し老親のこと
を頼奉る所なり又幼稚の世悴儀
は成長の上御用にも立へき者にて
いつくは何やうにも召仕ひ給はり

にして斗中上公より賜る所の一通の
状を髻に確と結つけて外より見
えぬやうに拵巻し其夜に寝所より
出て武田の陣所に忍ひ行信玄旗本
組の陣屋の邊を彳て徘徊せり武
田家警固の士是を見咎めし夜中に陣
の邊に彳むは如何さま曲者なるらし
大にあやしみ咎むれは件の小臣是を聞

殊の外仰天しける風情なりし其
言分明ならすして陳しくて其所を逃け
去んとせしを此形勢を見て武田勢
足軽より出合三十人斗彼者を取巻
て追取こめて生捕んとせしを此者兼て
期したることなれはすこしも驚かす
勇猛を見せ武田諸士猶鎮まらさる間へ
髻に結つけし状を取て散々に

引さかれ抜捨て其後刀を捨て向ふ
者に打てかゝり手本に三人切倒
し其外四五人手を負せ竟に其
身も討死にけり警固の者とも彼
冑のひきさき捨て首を取持て
信玄の実検に入る信玄始終の次第
委く尋聞てさて其首を継之
くこらし是を見るに謙信公より氏康

への密状なり其書中の略は連々
御計りしことく此度信玄を引出
さるることこそ大幸なり明日貴殿田領
小山の根の城を攻へきなりとき氏康
信玄か旗を以て後詰し給ふへし
御手の時刻を定め前後より取包み
信玄を討てんには信玄如何に秘
術を尽し戦ふとも則りよりとも信玄

を討取んことを思ふには疑ひあるへく
かゝることの趣なり信玄是を披見し
て大に疑ひを生しけり謙信お謀にて信
玄と氏康を隔つる一術にてこれ
あるへしとも毫もなしといへとも当
世の人は親きをも頼むへからさる
心中なる疑ひも折ふし其翌日謙信公
より又家人を使者を以て山の根の

城を攻落へしと北條武田支勢を以
て後詰し援へとなり氏康是を
聞て武田後詰氏康援ふとして
出勢し給ふ上は速なる軍勢を以
進めて山の根の後詰の儀偏に信
玄へ頼みまゐらせなり信玄氏康の
頼まるゝに自猜て疑を生し第一
松山の城を武田勢にまかせし氏康父子

大抵にして居りしことゝ是又我
勢上下不審在之所より今又山
の根の城在も信玄一軍在所ゝ後詰
頼しきあるは儀氏康氏政心底大きなる
疑しかるへし殊更に謙信とは兼ゝ盟
通の子細もこれあるやと一心安
堵せすしてこらへまてはゝ山の根の後詰
の儀は北條氏政一旗にて殊るへし杯

山の城にも甲州勢在所ゝ攻取ことゝ
百人の眼前なりけるに今又山の根
後詰北條家の人数は見掛の如くに
して武田勢にて後詰せは関東
に在りて北条氏康氏政弓矢の家の
瑕にも成へきうち兎にも角にも氏
康父子の大軍にて後詰し遂ひ自
然北條氏政は餘りなことゝまてある

にをいて早速出を發せらるべき處は家度の類有しといへども信玄にをいては山の根後諾叶ひ難し北條家の勇武を後陣より見捨らるべしとてなりし氏康父子信玄の延着を所業の外なりとて北條家も不審を生ぜし松田大道寺以下の諸臣を集めて評定ありといへども何れにても評儀

一決せずして乱國の習ひさまざまの雑説ありて信玄の延着を聞傳へ信玄家中に謙信と内通のこと有なりと風説して北條家の陣中静ならずして信玄氏康両国には響にてなりしといへども是よりは互に心底は山川千里を隔つが如し兎角山の根後諾評儀一決せずして内々に謙信公軍勢と

寄せしが北條武田は陣所の前を通して
て押通りけり山の根の城を一日の中に
もみ落し城中に籠る所の男女
に至るまで三千餘撫切にして城を
屠りて捨又本の道を押通りて武蔵
を関左八州奥西国までに振ひて越後
に凱旋しければ畢竟是名誉の
間者を以て北條武田の二将を嘲りて

甚親を離さしめんとするに依てなり
然るを武庫信玄心に疑ひ出けるに有
らずして是よりは信玄の胸中穏かならず
然れど後武庫より加勢を乞はれても
いくさもたとひ人数を出されても
いつも充分大に用心を為し馬場
高坂内藤山縣四人の老臣にも評
しさして北條家へ謝して密かに不

虞の術を成して武庫は謙信公よりも
謀略をなし信玄疑心を生ぜしむるにても
は夢にも知らずして信玄の形勢前に
に暗ることにて是を審にして是より孫
されば丈家の間にあれこれの雑説出来て
大将意に不和になれば若き公の智
恵より事起りて孫武が秘せる
所の用間の中死間をなすが即ちて

まで是孫武が記せし所の五法なり宜
敷良将に非ずして間の事を得る
こととなり難し扨然れども謙信公死間
をなして武康と信玄の親を離し大
将疑心を生ぜしめ武威を震はしこそ
大抵の勝をかへしてまで甚間にようこそ
死間を行ひましても本朝にてをは
らし中信玄の如き又不仁不慈武康の

愚昧斯る類ひまゝ聞の實を得る
ことゝ中〻思ひもよらぬ事なり右
に記する孫子の心を取べく公の微妙の
智當時の諸將目を開りしして論まて
へらしさる事を知るべし　春日山日記

一永禄六年越後の國主上杉輝虎入道
謙信三十四歳なり英雄の名高く
若年より數度の軍にて一度も不

覺をとらすして春日山にて在城して
武威さらんなり今年正月十五日
諸老臣を召して今明年は暫く
他國の出陣を止士卒を休息せしめ
且つ領國の政道を専にし百民を
撫育して軍用に足りるさらん事
を要とすへしと思ふなり其故は
今天下戰國の世となつて東西南

北擾乱に就て人民は国の本なり
先持国を豊にせんへしとあり老臣
皆貴命を兼て見識に国家武運
長久の基なりとて悲感して退出せり

一 越後軍記
春日山日記

永禄六年春近江国の住人楠済某と
いふ者越後に来て当家の奉公を
望み代々本家の秘密しけるとて白云

雲の巻を持来りて川田豊前守に
就て云へらく我を奉持せし彼楠済は
代々佐々木家譜代の士なりしかるに
当屋形左京大夫義賢朝臣の命に
背き本領没収せられて浪人し
けり豊前守も又祖世々江州の士な
り豊前国を去て謙信公に奉仕して
次第に登庸せられ遂に長臣と成りて

越後に蘊威を振ふことにて依く
猶高も豊茂なるに便て当家の秘物
を更く公要綱に聞届給ひて三百
貫の銀子を與へ豊茂なるを與力に預け
給ひしに謙信公右玄雲の一巻を
定行に見せしめ給へり拝して其
受用の可否を尋給ふ駿河守一巻
を披見して後申さく云斯雲気の巻

家々に傳来して秘事とせらるゝ所
あり乍らやゝりの類ひ其受用様々
心得あることにて以良将はよく知りて
後にこれを用ひ愚将は知らすして
先これを用ゆ良将は天文を能つかひ
愚将は却て天文につかはる能つかふ
とつかはるゝとは譬に天地懸隔なり
良将は能天文を授用絶得して吾

心のまゝに使ひ用るゆへに禍を轉
して福となし敵の善ハ味方の善
となす也愚将はこれに反す天文を
受授すといへとも其要用を知らすたゝ
天文に使はるゝ故に禍を轉して
福となすへき事を知らすして玄に従て
敵の悪事ハ却て善事となせり
惑して天文道雲氣孤虚旺相の類

は其書籍数多あれともさして大将
の賢愚によるところにて此序にさる程
に尉繚子も天官時日は只人事而
已とくり是末代までも良将の亀
鑑たるへしとや謙信公つねに是を座
験列に祠を可なりと信仰し給ひ
て此一巻は加治遠江守景英に渡し
賜ふ春日山の武者所に入道して

とくり　北越家書

国立公文書館
National Archives of Japan